



山登如

2021年度 付中通信第5号

建成國民中学校

2021.6.30 (水) 高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

日清戦争の結果、下関条約によって台湾が清朝（当時の中国）から日本に割譲されたのは1895年。日露戦争の結果、ポーツマス条約によって朝鮮半島への影響力を増した日本が、韓国を併合したのは1910年。

割譲とか併合とか表現は違えど、その後、第2次世界大戦が終結する1945年まで、台湾は50年間、韓国（今の北朝鮮も含む）は35年間、日本が直接統治した。

つまり、この2つの地域は日本であった。日本本土は内地と言われ、これらの地域は外地と言われたが、韓国の京城（ソウル）と台湾の台北にはそれぞれ帝国大学が設立された。戦前の日本の国立大学は旧7帝大と呼び習わされてきたが、帝国大学は実は9つあった。

そこで、私が興味を持つのは、外地にあった帝国大学へ進学した人たちのことである。



たぶん、統治する側の日本（内地）から移住した人の子どもが多かっただろうと考えるが、根拠はない。現地の人々に大学教育を施すには、そこにつながる学校制度を整え、教育内容を充実させる必要がある。その発想は、内地の、教育レベルを高めて産業振興に拍車をか

けようとする思想と同根である。外地人の大学進学者の割合が、当時の日本政府の外地統治の考え方を象徴的に表したと思うとおもしろい。

そんな話をまだ当時そこに生きた人々から直接聞ける、そんな縁を私は今、いろいろな偶然が重なって手にしている。

韓国には鄭忠錫氏が健在である。鄭氏は戦前、旧制高水中学校を卒業した、私の正真正銘の大先輩である。大正 15 年生まれ、奇しくも私の実父と同じ年に生まれた。13 歳の時（昭和 13 年）に高水中に入学し、5 年間刻苦勉強して内地の大学に進学、だが終戦と同時に帰国した方だ。

そしてこの度、終戦当時は台北市の尋常小学校の児童だったという中治宣光氏と知り合う幸運を得た。彼は終戦の時、小学 4 年生だった。両親が内地に引き上げることになったので、後ろ髪を引かれるような思いで帰国したという。彼にとって、台湾が故郷になっていたのだろう。

中治氏は現在、山口県日本台湾親善協会の会長さんとして、日台の友好に尽力されている。その彼の計らいで福岡にある台湾総領事の陳忠正氏から、台北市の建成國民中学校との姉妹校縁組の提案をいただくことになった。これは、台湾の外交ルートを通じての正式な依頼とあって、本校としては光栄な話、ありがたい話だと了解した。

ただ、相手校の学校を訪問したことも、まして校長先生にお会いしたこともない段階で、姉妹校という訳にはさすがに行かない。そこで、陳総領事の立会いの下で、両校の友好親善を進める「意向書」を交換することになった。

今はコロナ禍である。当面は、時差の違いも少ないので、ネットを利用したりリモートでの交流が進められたらと考えている。私自身は渡台が許される時期が来次第、中治会長と共に相手校におじゃまして、まずは校長同士の親交を深めたいと考えている。

最後に、種明かしだが、建成國民中学校の前身は小学校であり、戦前、中治氏の母校であった。